UKON 句集　　白薔薇　（しろそうび）

主の聖旨　　堅き二人に　　菊豊か

初雪や　　主の手自在の　　自然の画（え）

「天国に 行けるか」　　風の子等に聞く

妻の眼に　　小さき我あり　　春を抱く

葉桜や　　週ごと育つ　　志門ちゃん

天の川　　降る校庭に　　主と語る

病む我の　　手をとり祈る　　妻の汗

凍える手　　伸ばし　　特伝ビラ渡す　　※ 特別伝道集会案内のビラ

信仰の友　　妻の手に　　初日満つ

さぶき夜や　　妻が自慢の　　関東煮（かんとだき）

突然の 春雷　　聖書　　読みいし時

母の日に　　妻となる姉　　祈られて　　※ 名剣姉（しまい）結婚

祈る手に　　こもる力や　　待降節

降る雪や　　砕けぬわれに　　迫るなり

ストーブに　　生理学習の　　子ら 静まる

卒業の　　顔 顔 顔の　　写真撮る

「聖潔」（きよし）泣き　　元朝 動き　　はじめたり

初に見る ツツジぞ　　「聖潔」よく笑う

初日浴び　　這い廻る吾子　　愛 受けて

六の二を貫く　　児らの愛　　二月　　※ 六年二組

積もりゆく 庭雪　　審判主（さばきぬし）近し

巻雲の　　燃えるかなたの　　御国（みくに）かな

天高く　　天使ら見ゆる　　如きかな

大紅葉（だいこうよう）の中に　　嬉しき　　教師哉

妻祈る　　声に目覚めぬ　　待降節

創造の 色に　　戻りぬ　　初御空（はつみそら）

年頭の 祈りぞ　　舌に　　ふさわしき

たく刑の　　御顔に差すは　　春の日か　　※ 十字架刑

受胎告知　　うけしマリヤに　　春の風

雪粉雪　　主の御肩にも　　かかりしか

釘痕に　　さわりてみたし　　復活節

葉桜や　　バス待つ群の　　乙女たち

新緑や　　教えしままに　　礼をなす

水張りて　　田植え間近き　　大地かな

田植えして　　うすみどりなる　　大地かな

朝露の 薄も　　揺れる　　讃美かな

名月や　　祈祷（いのり）帰りの　　家族五人

鰯雲　　諸天より　　地のはてまでも

秋雷や　　姿勢よろしき　　鷲嶺翁　　※ 松尾鷲嶺兄（きょうだい）

あら玉の　　年のはじめの　　家拝（かはい）かな　　※ 家庭礼拝

うしろ身は　　みんな善人　　息白し

蜜柑むく　　若人 信じ　　はじめけり

春の風邪　　つぎつぎ子らに　　祈られて

受難日も　　死ぬるニュースは　　続きけり

食足りて　　足り過ぎて弱し　　復活祭

※「ヨルダンの岸辺まで」（日隅すみ子・著）を読む

若葉雨　　幾度集いし　　教会か

青葉若葉　　目に入るみんな　　クリスチャン　　※ 日本伝道会議

見よ 和合して　　韓国の　　葡萄食ふ　　※ エクスプロ ‘74

夏潮の　　民おしよせて　　ひれ伏して　　※ 韓国・ヨイド広場

潮浴（しおあび）や　　天を泳いで　　帰りたし

野分だつ　　豪雨の中や　　洗礼式

秋の夜や　　聖書を開く音　　妙に

花満ちて　　聖地より 妻　　帰り来し

春宵や　　世界一なる　　わが牧師

紫陽花に　　パウロの涙　　主の涙

スイートピー　　賛美うたえば　　揺れやまず

スイートピー　　御子をこばむは　　人ばかり

炎天や　　ほのおの舌が　　わが身より

わが内に　　妻は白ばら　　紅き薔薇

短夜や　　家拝のままの　　椅子配置

昼寝して　　又 訪伝に　　出でゆかん　　※ 訪問伝道

ひげのなき　　吾子の眠りよ　　寝待月

寒風に　　抗がふ岩よ　　賛美せよ

寒暁の祈りに　　胎の児の 育つ

春宵や　　動く胎児に　　祈りの手

朝刊の 波や　　聖書を　　春光に

大景の　　囀りの中　　主の祈り

手花火や　　光の子らは　　光 好き

愛情は　　菊を大きく　　咲かせけり

神知らぬ　　日々を過ごして　　降誕祭

新年（にいどし）の 涙ひからせ　　祈る人

男雛愛し　　女雛従ひ　　とこしえに　　※ 嫁ぐ日近き 枡田先生に

風の道 伝えて　　落花　　しきりなり

妻は薔薇　　家に帰りて　　安らぎぬ

妻は薔薇　　四つの蕾も　　育ちきて

さんびする 姿に　　匂ふ　　白菖蒲

祈りして　　汗は出ずれど　　癒されず

自（し）が罪は　　知らず 語らず　　原爆忌

夜の渚　　祈れば 波に　　乗る如し

ガラシア忌の　　妻 祈ること　　多くして

名月や　　妻と親しく　　腕組みて

秋天に　　右近 笑みいて　　我も笑む

右近像　　天に祈りて　　菊白し

鰯雲　　右近の国を　　流れゆく

好きなもの　　右近の神と　　秋の天

爽らいの　　天主堂跡　　妻子（めこ）歌ふ

聖樹の灯　　きらめくほどに　　祈るべし

地上では　　われも旅人　　右近の忌　　※ 2月3日

旅人の　　仰ぐ蒼穹（そうきゅう）　　右近の忌

天つ家（や）に　　もはや死もなし　　右近の忌

過ぎ去れば　　ひとひの如し　　右近の忌

初弾きや　　天に盲（めしい）は　　なかるべし

初弾きの　　主座にします　　イエス君（きみ）

春宵を　　祈り祈りて　　特伝日

こぼたれて　　軽しや軽し（かろし）　　蚊のいのち

野分雲　　祈り払われ　　洗礼式

主とともに　　天使とともに　　運動会

笑ひ笑ひ　　笑ひて 御国（みくに）　　初笑ひ

聖霊の宮　　ゆるがせて　　初笑ひ

春近し　　天使の如く　　ガラシアの書

再臨まで　　あと幾たびの　　良夜かな

待降節　　妻は祈りの座に　　着けり

臨在の　　ヨハネ伝の主よ　　年うつる

信友に　　点字ならざる　　年賀状　　※ 信仰の友

春宵や　　キリストにあって　　みな一つ

麗しき　　御子との出会い　　夕桜

受難日の　　雲行く　　右近受洗之地

大いなる　　右近育てし　　春の景

君 右近　　我 飛騨守　　春城址

土筆野を　　摘みつつ進む　　右近の地